

# 江北の四季

令和3年

1月31日

第42号



路の臺から蕾が顔を出しました。

## ○立春

今年の立春は二月三日。二十四節気(にじゅうしせつき)における春の始まりであり、一年の始まりとされる日。冬が遠ざかり春の気配が立ち始める日です。

二十四節気は太陽の運行に基づいてつくられ、夏至・冬至・春分・秋分の四つを春・夏・秋・冬を中心として決めた暦です。この四つの節気を「二至二分(にしにぶん)」と呼び、この四つの日の中間点が立春・立夏・立秋・立冬の「四立(しりゅう)」です。立春は、冬至と春分の中間点です。

一方、旧暦は太陰太陽暦(たいいんたいようれき)で、先ずは太陰つまり月の運行を基準にしています。月の満ち欠けの周期は約二十九日半なので十二ヶ月は約三百五十四日となり、実際の季節の変化とずれが生じます。そこでときどき閏月(うるづき)を入れて、季節が大きくずれないように調整しています。旧暦は、月の運行を基準としながらも、この調整をしているので「太陰太陽暦」と呼ばれるものです。旧暦の各月の一日は、朔(さく)と呼ばれる新月の日なので、旧暦の一月一日は立春とはなかなか一致しません。(今年の旧元旦は二月十二日)ただ、約三十年に一度、立春が朔と重なり旧暦の一月一日となる日があります。近年は一九九二年がそうでしたが、次は二〇三八年だそうです。

どちらにしても、地球が暖まったり冷えたりするには時間がかかりますから、実際の季節の変化は太陽の変化より一ヶ月余り遅れることとなります。

## ○そして、立春の前日が節分

今年は百二十四年ぶりの二月二日とか。節分は雑節の一つで、四立(しりゅう)の前日の「季節を分ける」日で、年に四日あります。旧暦では、立春(あるいは旧元日)は新年ですから、春の節分は、年越しの日となります。ですから、特に春の節分には、豆まきで厄除けをして新年の幸多いことを願ったのではないのでしょうか。

今年の節分はコロナ退散を願って、

鬼は外! 福は内!



黄水仙。水仙(白花の日本水仙)は冬の季語ですが、黄水仙は春の季語。明るい黄色の水仙を見ると春が来たと思います。



伊吹山(晴天の日に奥伊吹スキー場からその北側を見る)

○七十二候は第一候(立春・初候)、東風解凍(はるかぜこおりをとく)。

二十四節気をさらに約五日ごとの三つの期間(初候・次候・末候)に分けて、気象の動きや動植物の変化を知らせるのが七十二候(しちじゅうにこう)です。

いよいよ春が近づいてきました。東風と書いて「こち」と読むと春風のこと。東風というと菅原道真の歌を思い出します。

東風吹かば白いおこせよ梅の花  
主<sup>あるじ</sup> なしとて春を忘るな

道真が九州の太宰府に左遷されるとき、京の都で詠んだ歌です。

○梅

梅は百花の魁<sup>さきがけ</sup>。年の初め、梅はあらゆる花の先頭を切って咲き出します。奈良時代は白梅が愛され、平安時代になると白梅より紅梅が、そしてしだいに、花と言えば桜となつていきます。いにしえ人たちが愛して築きあげた文化のお陰で、私たちは白梅も紅梅もそして桜にも心躍らせることができます。

花を習い始めた頃は「梅は梅らしく、桃は桃らしく」と教わりましたが、何のこともやらかるようになってきたのはごく最近のことです。老木(あるいは苔<sup>こけぼく</sup>木)とずばえ(寿栄 瑞枝 まっすぐに伸びた若枝)を取り混ぜて花少なく生けると梅らしくなり、丸みのある枝で花多く生けると桃らしくなります。「花は足で生けよ」と言いますが、梅の木や桃の木を観察すると、まさにその通りです。実物をよく見て花を生け、花を生けてまた実物を見ると、今まで見ていて見えてなかったものが少しずつ見えてくるように思います。まあ、歳のせいかもしれません、……。



生花正風体(白梅の一種生)



立華新風体

梅、南天、水仙、椿、蠟梅、著莪、ビバーナム

「桃栗三年柿八年、梅は酸い酸い十三年、柚子の大馬鹿十八年」なんて言うことがあり、物事は一朝一夕にできるものではない、それ相応に時間がかかるものだという教えだそうですが、何の何の、梅をそれらしく生けるのに三十年余りかかってしまいました。それでも、仕上がり冷めた目で見ると、うーん、もう一つだなあ、ですね。